

エイズ感染の物語に感染しないために 疫病の政治学(2)

To Prevent the Infection of the HIV Infection Narrative:

The Politics of Epidemic Disease (2)

西山智則

NISHIYAMA, Tomonori

序 文化現象としてのエイズ

1994年横浜で第十回国際エイズ会議が開かれてから十年。いまだエボラ出血熱、狂牛病、SARS、と次々に伝染病が我々を襲ってやまない。ふと友人のまた友人に起こった実話として広がった都市伝説を思い出した。男が謎の美女と知り合いになり、意気投合した二人は一夜をホテルで過ごす。翌朝目を覚ました男はベッドに女がいないことに気がつく。不審に思ってバスルームを覗くと、鏡には真っ赤なルージュでこう書いてあった。「エイズの世界へようこそ」。また筒井康隆『文学部唯野教授』が浮かんできた。ホモでエイズに侵された斎木教授と飲みにいけば、同僚たちは蚊による感染に怯える。蚊では感染しないという説に対し、「あれはパニックが起ころぬようにというので流布された嘘だ...蚊が伝染させる病源体はいっぱいある。なんであれだけが感染しないなんていえるんだ¹⁾」。ホステスが蚊を潰すと、「叩いちゃいかんのだ...わしは恐ろしい。赤い赤い夢だ。嫌いなんだよこういうの。あれでだけは死にたかねえん

だよ。薬も何もなしでしょうが」(60)。斎木と性的関係のある助手に唯野がつかまれば、「ぼくも昨日やられたんですよ。あのエイズの手で腕をつかまれましたね(209)。エイズを怖がる同僚の中で、斎木がカポシ肉腫の塊のように思えてきて、「唯野のエイズ妄想はさらに膨れあがる。このままでは大学全体がエイズに侵され、ただひとりエイズではない自分はローマ市内のキリスト教徒、阪神間における巨人ファンといった趣になるのではなからうか」(174)。冷遇されてきた助手は、ついに体中に傷をつけ、血を塗りたい、噛み付いてまわり、復讐としてエイズを教授たちに広めようとする。それにしてもエイズの何がそれほどまでに恐ろしいのか。

エイズはまさしく謎の病だ。なぜエイズは蔓延したのか。この病はどこで発生し、誰が、いかにして国内に持ち込んだのか。人々にとりつき、冷徹に意味もなく殺してゆくエイズ。無意味な物ほど恐ろしいものはない。人々はパニック混沌状態に陥った。エイズの謎に答えるために、エイズに関する無数のリアルな「物語」が紡がれてゆく。混沌を整理するために、エ

キーワード：ナラティブ、エイズ、『そしてエイズは蔓延した』、ランディ・シルツ、『フィラデルフィア』
Key words : Narrative, HIV/AIDS, *And the Band Played on*, Randy Shilts, *Philadelphia*

イズという単なる病気に「意味」が見出されようとする。「真実」は言説によって築かれてゆくのである。事実（fact）が捏造（fabrication）と同根であることも忘れてはならない。たとえば、エイズの感染源にはまずゲイがあげられ、エイズは自然の摂理に背いた同性愛者たちに対する神の罰と見なされた。同性愛者たちの死には自業自得という意味が与えられたのだ。エイズの物語が紡がれ、ひとまず人々は安心する。我々には関係ないんだ、と。

トライクラーは実に三十以上ものエイズが意味するものをあげ、エイズを「意味の伝染病」と呼んだ⁽²⁾。同性愛者の伝染病、アナル・セックスの代償、性革命のつけ、神の罰、娼婦が撒き散らす疫病、精力旺盛な黒人がアフリカから持ち込んだ風土病、ツタンカーメンの墓に封印されていた細菌、テロリスト撲滅のためのCIAの兵器、エイリアンが作りだした病、資本主義壊滅をはかるソ連の秘密兵器、伐採された熱帯雨林の復讐、世界の終末の徴、先端免疫学が治癒すべき目標、一夫一妻性を貫けば予防できる性病。なかでも同性愛とアナル・セックスの病としてのイメージは、言葉を介して感染し、疫病のように人々を蝕み、その偏見を肥大していった。現実のエイズにもまして恐ろしいのは、偏見が物語を通して「真実らしさ」を獲得し、それが人々にとりついてゆくことである。「エイズの世界へようこそ」という都市伝説がよい例だろう。ここには女が病をうつす、それも故意に、という女性嫌悪が潜んでいる。感染の物語は感染する。まさしく言語自体が疫病なのだ。

現在はCG技術の進歩で見えないものの映像化が可能である。アフガンの洞窟に潜むゲリラへの空爆から、HIVが抗体のミサイル攻撃をかわし、T細胞に忍び込みゲリラ戦を展

開するといった戦闘の比喻が使われる身体の内部の戦争まで、CGは可視化することができる。香港映画『サース・ウォー』では感染者から咳で吐き出される緑色ウイルスが、人間の体内に侵入する様子がCGで描かれている。しかし可視化はCGによるヴィジュアル化だけを指すのではない。実体がなく、とらえようのないエイズのウイルスも、その輪郭を把握されなくてはならない。「ウイルスほど無意味なものはない。それは意味も目的も計画も持つことはない」とウィリアムソンは言う⁽³⁾。そんなエイズは表象だけが可視化し、管理可能にするのだ。「何の物語も持たないウイルスに表象は物語を与える」⁽⁴⁾。物語の結果、神の罰などといったトライクラーが挙げた無数の意味が生まれてゆく。見えないエイズの脅威は、その感染源とされた人々、すなわち黒人、ゲイ、売春婦などステレオタイプの表象により可視化され、管理できるのである。感染源としての患者にはマイノリティがあてられてきた。だが前編で検証したように、国家の不安を体現した他者が逆に、猿の姿を借りて、報復してくるイメージも疫病映画などに溢れていた。

同性愛者の疫病、娼婦が撒き散らす毒。エイズはこのように他者の病だと考えられてきた。誇張された感染源のステレオタイプが捏造され、疫病の原因を他者グループに転嫁することで、恐怖の原因から自分たちを無縁にして安心しようとするのだ。セックスにかかわる病というイメージの強いエイズでは、感染を「自己責任の悪」とするために、ドラッグや（アナル）セックスの乱交という原因があげられる。そして五つのカテゴリーを通じて、社会的弱者が性倒錯者という悪を背負われ感染源として非難されるのである。人種

(ハイチ系の黒人移民に患者が多いとする) 階級(薬物に耽溺する貧民街の住人を患者に設定) ジェンダー(娼婦が毒を撒き散らす) 地域(エイズの起源をアフリカに定める) セクシャリティ(同性愛者がある原因と考える)。こうした操作が医学的には征服できないエイズを心理的に制御する戦略となるのだ。自分たちを正常と定義する上流階級の白人たちには無縁の「他者の病」としてのエイズが捏造されてゆくのである。「死ぬのは奴らだ」。

また感染について語る時、誰が、なぜ、どのようにして、という点が核となる。それは前編で述べたように、『ドラキュラ』の物語構造でもあった。『ドラキュラ』では、大英帝国にひそかに侵入しペストのように感染してゆく吸血鬼の追跡と抹殺が描かれていた。『ドラキュラ』はアメリカで繰り返しリメイクされ、その構造は冷戦期のエイリアンの侵入と撃退を描く『ボディ・スナッチャー』などの多くのSF映画、『アウトブレイク』などの疫病映画が引き継いでゆく。病の起源を求める構造はエイズ第一号患者を特定したとするランディ・シルツの『そしてエイズは蔓延した』にも共通している。病の感染源を発見することは、原因を見つけ、治療を可能にする一貫性という^{すいり}解釈を構築することである。こう考えると、医学的説明にも女性嫌悪や同性愛恐怖などの他者恐怖が介在し、その構成にも「解釈という物語」が使われる以上、科学性や客観性ばかりを掲げられない。ここで言語にかかわる文学批評が医学などの領域を検証する意義が生まれる。たとえば、1894年にH.G. ウエルズがその存在が証明されて間もない細菌を利用し「盗まれたバチルス菌」という小説を書いたというような、細菌学説が一方的に文学に与えた影響ばかりを探るのではなく

(こうした立場は医学をヒエラルキーの上位においてしまう) 逆に物語構造上で医学的あるいは細菌学説が小説などと共有している言説も視野にいった研究が必要だろう。

今とりあえず我々にはエイズと縁のあるウイルスに対して「ヒト免疫不全ウイルス」つまりHIV (Human Immunodeficiency Virus) という名がある。だが1983年にエイズのウイルスが発見された時、そのウイルスにはHTLV- (Human T-cell Leukemia Virus, Type) という名が与えられた。これに対して、白血病 (leukemia) よりもリンパ腺 (lymph gland) に関わる病気なので、むしろLAV (Lymphadenopathy Virus) と呼ぶ者も現われた。また論争の最中には、「HTLV- /LAV」を使う雑誌もあった。トライクラーによれば、「HTLV- /LAV」の「/」はウイルスのアイデンティティが議論により文化的に構成されたことを示している(167)。1986年のHIVという名前はこうした論争の「妥協」であり、多様な言説を^{コントロール}整理する働きでもある。もともと「科学的学説」とは次の説が出てくるまでの「仮説」にすぎない。AIDSという名も、この病が「解明」されるまでの仮称である。初期に死亡した人々が同性と頻りに性交渉を持つ若い男性だったことから、1982年にエイズが「ゲイ関連免疫不全症候群GRIDS (Gay Related Immune Deficiency Syndrome)」と呼ばれていたことも忘れてはならない。トライクラーは次のように説明している。「名前は科学的な実体を構成するのに重要な役割を果たす。名前は複雑で十分に理解されていない対象に一貫性を与え、把握してゆくためのシニフィアンとして機能する。そして名前は社会的に重要で概念上リアルな実体を成立させる」(167-8)。エイズという名は、あたかも問

題が解決したような印象を与え、無数の言説を束ね、構成された「実体」でしかない HIV 感染は必要だが、エイズの感染発病には、ドラッグの常用、栄養失調などの他の多様な要因が必要かもしれないと、HIV を原因、エイズをその結果とする直線的な因果関係を否定する説がある。またエイズ会議が「エイズ産業の商品を売り込むことを目的」とする「^{トレード・ショー}試写会」であり、「ウイルスを原因とする説に異議を唱えると、検閲が実施されるのはよく知られている」という批判も記憶しておこう⁽⁵⁾。

科学は真理を発見するのではなく真理を発明する。「科学が自然に隠れた真実を探し出すと考えられるのは、真理とされる知を主張する力関係が科学的事実にしり変えられ、社会的背景が隠されるからである。真理が社会的コンテキストによらないことを科学は我々に納得させるのだ」⁽⁶⁾。本論の目的は、エイズに関わる多数の説の何が本当であるか、またエイズの実体を見極めることではない。むしろ絡み合う表象や物語がいかに「真理」を生産してゆくか、その過程や力の働きという文化的コンテキストを検証してゆくことにある。しかしながら、勿論、実際の病としてのエイズを否定するのではない。エイズというリアルであるはずの現象が、何も介在しない透明な実体ではなく、言語やイメージという言説において文化的に構成されることを示したのである。透明なはずの部分に差し挟まれた他者恐怖というレンズを検証してゆく。映画や小説や都市伝説などの「フィクション」、科学雑誌などの「ドキュメント」で、エイズなどの伝染病がどのように表象されているのか（この二つの区分は妥当なのか）、多様な領域を横断して、感染源とされた黒人やゲイや女のイメージを眺めることで、エイズを中心と

した感染の語り方を考察してみたい。そうすることで、エイズ恐怖の根幹にある文化の境界線攪乱という国家不安が見えてくるはずだ。

・感染源としての黒人

ゾンビが感染し増殖する1977年のジョージ・A・ロメロ監督の『ゾンビ』のリメイク、『ドーン・オブ・ザ・デッド』が2004年に公開された。この映画で特筆すべきは、すでに『パタリアン』や『28日後』で実践されているとはいえ、走るゾンビの素早さである。また車に群がってくるスピードは、イラクのアメリカ軍の車両に爆弾を投げかけてくるテロリストを思わせる。世界の終末を思わせる映画の冒頭にはイスラム教の礼拝の儀式的シーンが挿入されている。（ロメロが監督しスプラッター映画の先駆けとなった1968年の『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』の残酷な映像はベトナムでの戦死者を映すニュース報道に影響を受けていた）。しかしながら、ゾンビ映画で特徴的なイメージは、映画のポスターでも使われているように、窓や扉を叩く無数のゾンビの手である。『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』のドアや窓を破ろうと無数の手を叩きつけてくるゾンビ集団。これに似た映像がはるか以前に存在した。映画の父 D. W. グリフィスが1915年に監督した『国民の創生』で黒人の帝国を築こうと、南部の白人が立てこもる小屋を包囲し、扉から手を挿入してくる黒人の群れだ。建物の外から内に差し込まれてくるこれらの手は人種の他者の恐怖を喚起する。インドやアフリカで猛獣狩りを楽しみアメリカでは人間狩りまで行なった英国人が、アメリカから持ち帰った黒ずみ干からびた人間の手に絞殺されるモーパッサンの「手」から、退役した曹長がイン

ドから持ち帰った三つの願いをかなえる猿の手がもたらす災いを描いたW.W.ジェイコブズの「猿の手」が示すように、かつて大英帝国も報復してくる手に怯えていた。そして20世紀には手の恐怖がアメリカにもとり憑いてしまった。さらに感染の恐怖も。

ここで『スリラー』でゾンビに変身していたスターの手にまつわる裁判が思い浮かぶ。マイケル・ジャクソンが少年たちにその手で性的虐待を行なっているという疑惑だ。世界の目が向けられている。興味深いのは、マイケルの手の物語が、1919年のシャーウッド・アンダーソンの小説『ワインズバーグ・オハイオ』のウイング・ビドルボームの手の物語を反復していることだ。小学校の教師ビドルボームは繊細で優美な手の動きで人々から愛されていた。彼はその手で少年の髪や肩を触ったり撫ぜたりしていた。それは「子供たちの頭に夢を運ぼうとする彼の努力の一部だった。彼は自分の指の愛撫を通じて自己を表現するのだった...彼の手の愛撫を受ければ、少年たちの頭から疑念や不信の念が抜け去って、彼らもまた夢を見始めるのだった」⁷⁾。しかしながらこの教師は同性愛の疑いを受け町から追放されてしまう。マイケルのように、マイケル・ジャクソンは『スリラー』で狼男やゾンビに変身し、『ムーンウォーカー』では車やロボットに変身する。実生活でも実際に肌が白くなり、整形手術で黒人の顔からディアスポラ離脱を企てる。宙に舞うダンスで重力に逆トランスグレッサーらう境界攪乱者マイケル。まるで「ウイルス界のカメレオンのごとくその色を変え、次々と「遺伝的構造を変化させる」HIVのようだ⁸⁾。マイケルの手の物語が同性愛の欲望から引き起こされたかどうかは、まだ分からない。だが境界を侵すマイケルを力が罰する

のである。

アメリカでは人種がらみの手の脅威を表す都市伝説にはことかかない。リンチで殺害された黒人が甦り復讐する映画『キャンディマン』で有名になったが、車の中で性行為をするカップルを襲う「鉤手の男フック」から、番犬のドーベルマンが部屋に忍び込んでいたらしい黒人の手の指を吐き出す「喉をつまらせたドーベルマン」まで、侵入してくる黒人は恐怖を振りまく。「エイズの世界へようこそ」でさえ「舐められた手」という都市伝説の変形らしい。友人と夜更かしを楽しんだ女の子が深夜ふと起きる。不安からベッドの下を探ると、飼い犬が手を舐めたので安心してまた眠る。翌朝目を覚ますと、友達は虐殺され、「人間だって舐めることができるんだぞ」というメモが残されていた。安堵の接触が恐怖の接触に変わる。ディズニー映画『モンスター・インク』においてでさえ、異界に住むモンスターたちが逆に、人間に少しでも触ると死んでしまうと怯えている。二億七千万の人口で二億五千丁の銃が存在し、侵入者の脅威に対して人々がその手で銃を握っている国。犯罪の責任の転嫁を可能にする危険な黒人というステレオタイプの物語によって、他者恐怖がすり込まれ、銃器が販売されてゆく様をマイケル・ムーアは批判していた(だがムーアもまた銃の恐怖につけこんだ映画で大儲けする)。黒さは恐怖を喚起し、罪を背負わせるのに格好のレットルだ。常に異なる者の脅威に怯えてきた。アメリカはそんな国である。

20世紀初頭から国境を越えてくる移民に怯えるアメリカで、繰り返される「侵入してくる手」は外国恐怖症を煽っていった。他者の脅威の手の物語に対して、意思疎通を交わす手の物語も製作される。『E. T.』では少年と地

球外生物が、『愛は霧のかなたに』では女性動物学者と絶滅寸前のゴリラが、『アウトブレイク2000』ではスペイン風邪に感染した南米からの不法入国少女と防護服を脱いだ米国女性細菌学者が、そして最新の『アイ、ロボット』では人類に反乱したロボットとそれを追う刑事が、それぞれ手を握り合う。通常の接触ではHIVは感染しないことを示すエイズのポスターでは取り合う手のイメージは定番である。だが、手は、いつ反転して、他者を殲滅する武器を握るのか分からない。『2001年宇宙の旅』の冒頭では、猿が武器として手に握った骨を空中に投げ、それが宇宙に浮かぶ宇宙船に変わる。そこに人類の「進化」を読み込むかもしれないが、シナリオでは宇宙船は核ミサイル衛星であった。骨という道具を握った人類が自分を滅ぼす核兵器を手に握るまでに「退化」したのである。そして20世紀末エイズという敵に対してアメリカが手にするのは、エイズの表象を可能にする「^{オラティブ}物語」という武器なのである。

1980年代に4Hというエイズの危険レッテルがあった。ホモセクシャル（homosexual）、ヘロイン常用者（heroin addict）、血友病患者（hemophiliacs）、ハイチ人（Haitians）である。このハイチはヴドゥー教のゾンビ伝説で有名な島である。ハイチ人は北米への感染源として差別されてきた。1987年の『ライフ』には医師リチャード・シルザーの「死の顔を覆うマスク エイズのハイチ襲撃と真実に対するタブーの発見」という特別レポートが掲載された⁽⁹⁾。夜十時シルザーはまず荒れ果てた売春宿で娼婦たちにインタビューを試みる。「エイズ、そんな病気は存在しないの。貧しい国を利用するアメリカ政府が発明した嘘の病気なの。アメリカの大統領は貧しい人間が

嫌いで、エイズをでっち上げて私たちのなけなしの物を奪うのよ」と娼婦は言う。「もし君がエイズであること、自分の血が悪いことを知っていても、まだ男と寝るのかね」と尋ねると、彼女は突然笑い出した。「何も知りやしないくせに」(60)。

エイズ存在を信じない無知な娼婦を「君はハイチの男たちを殺しているのだよ」(60)と、シルザーは非難する。トライクラーが指摘するように、シルザーにとって、エイズはセックスにまつわる「道徳/死の物語（mor(t)ality tale）」である(102)。「死の顔を覆うマスク」というタイトルのとおり、シルザーはマスクの下に隠蔽された真実を暴き、ハイチの窮状を世界に報告する西洋から来た告発者となる。だが前編で眺めたボオの「赤き死の仮面」では、疫病の世界から僧院に忍び込んできた人物のマスクを取り去り正体を暴こうとしたプロスペローは、その仮面の下が人間の姿など微塵もない虚無だったことに直面したが、シルザーのレポートもマスクで隠された現実を暴露してはいない。むしろハイチの現状を^{ヴェイジブル}浮き彫りにする客観的な報告というマスクの下に、シルザーの欲望が隠されていた。

シルザーが次に訪問するのが、「迷路のような廊下」と「多くの小部屋」があり、「やつれて黙ったままの男女で待合室がいっぱい」になっている病院である。そこで「聞こえる声といえば、咳と混じった患者のうめき声だけである」(60)。やがて27歳の男が「ハイチが侵されている病原菌の感染の媒体」であるバスに乗って診療にやって来る。その男の「皮膚は汚いかさぶたで覆われている。ずっと男は無心に体を搔き、このかさぶたは痒疹と呼ばれハイチのエイズの特徴である」。「二

年前国の血液バンクが汚染されていた時に輸血をした」女性は「片目が菌でできた腫瘍のようにになっている」(61)。「金のために数年前外国人とオーラル・セックス」をしたパイセクシャルの男性は、「耳から頬に膿がたれてそこで固まっている」(61)。だが病院にはベッドも薬も治療する医師も足りない。医師はこう呟く。「明日か、明後日か。また次の日か、彼女は山を登ってヴドゥー教の呪術師の所へ安らぎを求めてゆくだろう。彼女の奴隷だった先祖が二百年前にやったように」(61)。第三世界についてのお馴染みのイメージが、ハイチのエイズについて「^{ステレオタイプ}真実」らしさを支えている。

じつはシルザーにとって監視の対象であるのはヴドゥー教という迷信かもしれない。アメリカの牧師の言葉が引用される。「ここで最も厄介なのはヴドゥー教だよ...悪魔のような宗教でハイチの癌なんだよ。ヴドゥー教はエイズよりも問題なんだ。そしてこの疫病の原因の一つなんだ。ヴドゥー教の呪術師になるためには他の男とアナル・セックスをしなくちゃならない...だからホモセクシャルが儀式化するんだ。こうしてエイズが広まったわけさ...姦淫の罪さ」(62)。「世界じゅうのゲイにセックスには格好の場所として知られる」(64)ハイチが、男女のセクシャリティの区分が消えた「現代のソドムとゴモラ」(61)と紹介される。「ハイチではパイセクシャルが当たり前で、その土地でできるのは「教育しかないが、ハイチ人はコンドームの使用を拒むのである」(64)。ハイチのエイズ蔓延の原因は無知と迷信だとされる(だがアフリカなどの針を交換できない国の貧困も考慮せず、西洋が導入した注射針の方法も原因だった)。エイズは治療できないが、ハイチの風習は治

療できる。シルザーの記事には、第三世界を無知な謎の暗黒として呼び出し、その謎を西洋の理性と科学によってコントロールしようとする欲望が満ちている。彼の手が紡ぎ出す植民地主義の頃から続く「^{ナラティブ}暗黒大陸の物語」は、エイズと第三世界を把握することを可能にしてゆくのである。

辺境は病巣として恐怖の舞台を提供する。狂牛病を扱うリチャード・ローズのドキュメンタリー『死の病原体プリオン』の第一章は、「ニューギニアは地球の最後の秘境である。探検家も恐れて避ける所だ。その付近で難破してもミクロネシアの原住民は別の場所を目指して泳ぐ」と、フォアでの食人習慣を紹介している⁽¹⁰⁾。「焚き火のゆらめく畑では、死んだ女性の娘たちが死者の手首や足首を輪切りにしている...女の胸や腹を切り裂き、死臭が甘藷畑まで漂う...血の塊のついた赤黒い心臓が取り出される。抜れた腸が取り出され、鈍く光っている。糞便でさえゼンマイと一緒に料理されバナナの葉において食べてしまう」(22)。フォアで人肉を食べるのは女たちで、「男は死体をめったに食べない、食べても赤身だけを隠れて食べる」。死体を喰らうゾンビとなるのは女たちである。「もし死体が男なら妻はペニスを受け取るのだ」(23)。男を去勢する女。肉骨粉となった牛を共食いする牛のように、人間を食べる野蛮な風習が著作の全体から突出して強調される。フォアは食人の禁止というタブーがない境界線の消失した場所である。原住民が呪術によるものだ⁽¹¹⁾と信じ「笑い死病」と呼ばれた疫病は、「フォアの人々が食人の習慣を止めた時に感染源を絶つことができた」(222)というローズのドキュメンタリーは、シルザーと同じ物語を共有しているのは言うまでもない。

・感染源としてのゲイ

ゾンビと並んで感染と増殖の恐怖をふりまく怪物にヴァンパイアがいる。1980年代、レーガン政権のもとでは、切る、裂く、出血予算など演説の修辞として血を連想させる言葉がよく使われ、ダイオキシン、発癌性添加物、有害廃棄物、スリー・マイル島やチェルノブイリの放射能汚染と、様々な汚染や毒が大衆の想像力をとらえていた⁽¹¹⁾。そうした時代、エイズはまずゲイの男性が仲介する病気と見なされたが、吸血鬼のイメージもそこに混じっていった。1985年の映画『フライトナイト』ではチャーリーの家の隣に、若い男性パートナーと共に吸血鬼が引っ越してくる。チャーリーの母親は二人はきっとホモだと疑う。また『ロスト・ボーイズ』では不良少年たちの吸血鬼グループが登場する。主人公の兄がドラッグ・パーティを思わせるその集団のパーティに参加し、血を飲まされトリップ状態に陥り、吸血鬼となる。「このシーンは吸血鬼とドラッグとアルコール依存症の関連、そして隠れたホモセクシャリティのテーマを思わせる」と指摘されている⁽¹²⁾。前編で考察したように、1897年に書かれたストーカー原作の『ドラキュラ』にさえ同性愛恐怖が刻印されていた。仲間を引き込み増えてゆくことされたゲイ、注射器の針のように牙を食い込ませ人々を感染させてゆく吸血鬼、そしてエイズ。この三つが大衆文化のなかで融合する。『ニューズウィーク』などのエイズ予防の広告では「私でさえエイズが怖い」とドラキュラが怯えるのである。

吸血鬼とエイズを結びつけた作家にダン・シモンズがいる。『夜の子供たち』では米国防疫センターの一行はトランシルヴァニアの不

衛生極まりない孤児施設を調査する。そこでエイズに感染した孤児のなかにドラキュラの子孫だと思われる赤ん坊がいることを発見した。その血はエイズ治療の鍵となるのである。生き血を啜るように国民を搾取する独裁者チャウシェスクが批判され、ルーマニアの国家体制自体が吸血鬼とされる。「ソヴィエト連邦も、ルーマニアという社会主義国と同じように、とっくに歴史の廃棄物の仲間入りをしている。でも、どちらにも自分の死を認めるだけのたしなみがないのさ、まるでノスフェラトゥだね」⁽¹³⁾。またシモンズは「バンコクに死す」で、トーマス・マンの小説で美少年に魅惑された作家が死す疫病のヴェニスではなく、「汚染された河の悪臭」と「青臭い精液のにおいと、銅のような血のにおい」が漂い、「性交と中毒」に耽溺するアジアを浮かびあがらせた⁽¹⁴⁾。長い舌を使ったフェラチオで精液と血を吸い取り売春をする吸血鬼が登場する。この吸血鬼は行為の前にHIVの陰性を示す証明書を要求する。友人を殺されたゲイの主人公は、書類を偽装してエイズに罹った自分の「死の血」で吸血鬼に復讐を果たす。これらの小説ではエイズ、辺境、吸血鬼、ゲイがオリエンタリズムのもとで結びついている。

こうした血のフィクションと共に、「ジャーナリズムの作品。フィクションは一切ない」ことを謳い、後にテレビ化までされた『そしてエイズは蔓延した』のようなノンフィクションも1987年に登場する⁽¹⁵⁾。ゲイであり1994年にエイズで死亡する著者シルツ。だがゲイの市長の伝記などを書き差別の撤回を目指す彼の仕事が、皮肉にも差別を強化してしまう⁽¹⁶⁾。起源の探究にとりつかれたシルツは、北米にエイズを蔓延させた第一号の患者として、フレンチ・カナディアン航空のス

チュワードで同性愛者、ガエタン・デュガの足取りを追跡してゆく。HIVに感染し引退したバスケット選手マジック・ジョンソンが感染を妻に告白した時、「彼女は決してウイルスの感染経路について問いただそうとはしなかった。そんなことは問題ではない。過ぎたことは、もうどうすることもできない」と伝記に書かれている⁽¹⁷⁾。しかしながら、だれが、いかにして、何のために、という感染経路の究明がエイズの物語の核となることは間違いない。『ドラキュラ』の26章でロンドンから逃げだす伯爵の逃亡経路を、ミーナが詳細なデータから推測してゆく推理小説的な場面さながらに、シルツはガエタンによるエイズの感染経路を暴いてゆく。だが感染源の解明は噂の出所を突き止めるような不毛なものだ。またフィクションとノンフィクションを区別できるのか。『そしてエイズは蔓延した』はまるで恐怖小説なのだから。科学は「事実」を扱う客観的な分野で、主観的なイデオロギーや小説のようなフィクションの対極だとされる。しかし、ある原因を求めて断片に脈絡をつけ整理してゆく説明には、「解釈という物語」が発生せざるをえない。

エイズ流行初期にはゲイがHIVに感染する科学的根拠が幾つか提唱された。ゲイはアナル・セックスをする。頑丈な膣とは違い、肛門は傷つきやすい。ゲイのセックスは回数が多く激しい。また肛門を緩めるために薬品を使う。だがこうした説明は、ゲイがセックスを楽しむ方法は他にあるにもかかわらず、ゲイのセックスと言えば、アナル・セックスだけを思い浮かべる解釈である（皮肉なことにアナル・セックスがゲイの主要な性交の方法だと連想されだしたのはエイズ流行の後である）。ゲイ＝肛門＝傷＝エイズ、そして死、と

いう図式だ（同性愛、疫病、死が結びつく「ヴェニスに死す」もこれと同じ枠組みがもしれない）。この図式で1985年に科学紙『ディスクバリー』は「エイズ最新の科学的事実」という特集を組んだ。「エイズは大多数の異性愛者や人類にとって脅威ではない。アナル・セックスを行なった者が支払う致命的な代償である」とその表紙にある。どこが「最新の科学的事実」なのだろうか。この雑誌で疫病学の教授は述べる。「同性愛の嗜好を宣言する15や16歳の子供は、それから生と死に関わる病に感染する可能性が生じることを知らなくてはならない」⁽¹⁸⁾。客観性を旗手とする医学の背後に同性愛嫌悪が隠れている。AIDSのAはAnusのA。ウイルスの病巣である肛門を意味する緋文字となる。それは閉じられた身体の扉だ。扉を破りウイルスが侵入してくる。1985年に7月号に『ライフ』は表紙にホラー映画まがいに赤い文字でこう綴った。「誰もエイズからは逃げられない」。

出産を基準にして、それにかかわらない性行為は、全て「不自然なかたち」のセックスとして排除される。エイズが蔓延する可能性があろうが男女のセックスは禁止できない。だがゲイのセックスは異常であるから規制できると、レーガン政権のもと同性愛者の権利は抑圧された。「哀れな同性愛者たちは自然に戦いを挑んだ。自然は恐ろしい報復を返しつつある」⁽¹⁹⁾。1983年の『ニューヨーク・ポスト』に掲載されたレーガンの元スピーチ・ライターのパトリック・ブキャナンの言葉である。エイズは異性愛という「自然/正常」を犯した罰とされた。だが正常と異常を区別できるのか。セクシャリティは時代や地域で少なからず異なりはしないか。正常を決定するために異常が捏造されはしないのか。『そして

エイズは蔓延した』の著者ランディ・シルツは、道徳的な生活を送る白人である自分を、腐敗を暴く正義にまつりあげるために、悪を体現するエイズ患者をつくりあげた⁽²⁰⁾。あるいは同性愛である自分の抑圧されたセクシャリティをガエタンに投影したのかもしれない。

『そしてエイズは蔓延した』は凄まじいまでの同性愛嫌悪に満ち溢れた本である。千人以上の男と寝たゲイなどが紹介され、ゲイの不道徳な行為がエイズの原因として追求される。乱交の罰を受けるように、「次々に患者たちはこの恐るべき新症状を示し、衰弱し、惨めに死んでいった…シモンも脳のリンパ癌に苦しみ…カボシ肉腫も情け容赦なかった。美しかった顔はカボシ肉腫で変形し、身体は投薬でむくみ、水ぶくれしてかさぶたまみれのエレファント・マンのようになり果ててしまった（127）。ブラウディという患者は紫の斑点が始め、「体重が20パウンドも減り、紫色の斑点のたるんだ肉からは骨が突き出した。美しかったかつての顔も治療できないヘルペスのために厚いかさぶたで覆われてしまった。通常の薬はこのヘルペスに効果がなく、彼の顔は一面に膿が滲んでいた（157）。悲惨な描写である。こうしたイメージがどんな差別と偏見を生むのかという配慮はない。

吸血鬼に焼き付けられる十字架の刻印のように、カボシ肉腫や皮膚の斑点は道徳を蝕まれたゲイの特徴とされる。それはアメリカを侵食してゆく斑点となる。エイズ差別の根幹にあるのは、ウイルスの感染よりも、むしろ道徳の腐敗、性の境界線の瓦解に対する恐れだ。ドラキュラを追跡するヴァン・ヘルシングとして、あるいはインドから運ばれた毒蛇による事件を解明するホームズとして、シルツは悪を体現する「斑のホモ」の謎を追跡し

てゆく。1976年のアメリカ建国祭の時に、全米から集まった人々がHIVに感染し国中に広がっていた。シルツは感染源の「ゼロ号患者」としてある同性愛者を突き止めた。カナダ航空のスチュワードとして各地を移動し、初期同性愛感染者248人のうち40人と関係をもったガエタンを「発見/発明」したのである。ガエタンがどこで感染したのがシルツは示していない。だが冒頭にエイズで死亡したザイールの医師を紹介し、エボラ出血熱のような「殺し屋が目覚めたところが世界の果て」だったのは幸運であったが、「ジェット機を使えば地球のどこも決して遠くない」（5）と、アフリカからの感染者によってウイルスが持ち込まれ、アメリカが犠牲になるという前編で考察したハリウッドSF的物語^{ナラティブ}を利用している。

ガエタンは、エイズであることを知りながらも、「自分の身体を使ってやりたいことをする権利が私にはある」（200）と、セックスを止めようとしめない。「ガエタンにとってセックスは単なるセックスではなくガエタンそのものだった」（251）。「バスハウスでは男のうめき声が止み、若い男が煙草を吸おうと身体の向きを変えた。ガエタン・デュガは明らかに手を伸ばし、相手の目が慣れるようにスイッチをゆっくりとひねり、胸の紫色の斑点をよく見ると言った。『ゲイの癌だよ』と、彼は独り言のように呟いた。『きっと、君にもうつるだろう』（198）。恐怖小説にも劣らない不気味な場面である。「エイズの世界へようこそ」と似ているのは言うまでもない。推理小説、恐怖小説、都市伝説がノンフィクションと溶け合う（だがシルツはこれが虚構ではなく実際にガエタンにこの行為をされた男と対談した、と会談で断言している⁽²¹⁾）。

俺が一番美しいと白雪姫の継母のように鏡に見入り、「ソフトなケベック風の発音と性的な磁力にアメリカ人たちは群がった。サンフランシスコほどこの21歳のスチュワードが少年たちを誘惑しやすい場所はなかった」(21)と書かれる美形のガエタン。彼は夜の街を彷徨い少年を誘惑する吸血鬼を思わせる。悪そのものを背負い、エイズを蔓延させたこの男は、あらざるべきセクシャリティを体現することで、正常となるセクシャリティを構成するのに使われる。家庭を営む白人の異性愛が正常とされるのだ。シルツが行なったことは、ゲイ解放運動が脅かしたセクシャリティの境界線を新たに引き直すことだった。

・感染源としての女

ここで再び「エイズの世界へようこそ」の都市伝説を思い出そう。男を驚愕させるこのセリフを描く赤いルーージュは危険な女のセクシャリティを表している。女がエイズの感染源となっていることに注目したい。都市伝説研究家ブルンヴァンはこの噂の原型を二つ調査している⁽²²⁾。梅毒で敵を殺害するために治療を受けず、将校たちと寝たフランス軍大尉の情婦を描いた「29号の寝台」というモーパッサンの1884年の短編、20世紀初頭に自分がチフスであることを知りながらも家政婦として働き、料理を通してニューヨーク一帯に疫病を撒き散らし、警察に隔離されたアイルランド移民のチフスのメアリー(図1)。この二つがそうだ。男たちは女からの汚染を恐れてきたのである。

20世紀初頭、アメリカでは移民との雑婚による「精神薄弱」の子供の誕生が懸念されていた。この問題に対処するために優生学が猛烈に推進される。1912年にヘンリー・ゴダー

ドは影響力のある優生学の著書『カリカック家の人々』を出版し、「一般人口の二倍のスピードで出産されている精神薄弱者」の増加に警鐘を鳴らす⁽²³⁾。独立戦争勃発時マーティン・カリカックという将校が精神薄弱の売春婦と関係を持ち、後にこの娼婦はその子マーティンを出産する。このジュニアからは総勢480人の子孫が生まれる。だが、その大部分が精神薄弱者、アル中、娼婦、犯罪者であり、健康な者は46人にすぎなかったと書かれている。やはり女に毒がある。女がうつすという意識をもっと遡ってみよう。1844年のホーソンの短編「ラパチーニの娘」では、エデンの園を思わせる庭園に、「様々の種の植物を交配し姦淫させたことを示す人工物」の毒草が育てられている⁽²⁴⁾。毒草を妹と呼び毒で育てられた娘ベアトリスは、庭園に誘ったジョバンニに触ると「手の指の紫色の痣」を残し、彼を毒人間にしてしまう。あなたの心にも毒がなかったのかと、ベアトリスが男の偏見を問い直す最期にもかかわらず、「ラパチーニの娘」は男を毒に感染させる女の物語である(また「痣」では夫が妻の顔にある「手の形の痣」を科学の力で取り除こうとする)。さらにたどり着くはずのない起源を遡れば、イブという女に誘われ、知恵の実という毒に感染したアダムの物語に到着するのもかもしれない。

梅毒予防のポスターには病根としての男を誘惑し死に追いやる女がよく使われていた。

1987年の『サンディエゴ・トリビューン』のJ.D.クロウがエイズの脅威を娼婦の一団で描いた漫画は、梅毒の「死をもたらず娼婦」の図像を継承している⁽²⁵⁾。細菌兵器の感染で人工島の住人がゾンビとなる『バイオ・ハザード』には、黒人のL.J.が街角でゾンビになった売春婦の一団に見とれて車を追突させる場

面がある。このゾンビになった娼婦の一団の映像がクロウの漫画に何と似ていることだろう。こうした映像は女を誘惑する感染源と考える言説を共有している。最近の映画を見てみると、『アウトブレイク2000』では、スペイン風邪に感染した南米の少女がロサンゼルス
の恋人に会うために、国境を越え密入国し、米国が壊滅の危機に陥る。ヨットで料理を作るために雇われ、料理に咳き込み、乗組員たちに感染させ死亡させるこの少女は、チフスのメアリーの末裔と呼んでもよいだろう⁽²⁶⁾。

疫病が流行しても、目に見えない細菌だけでは、隔離と検疫という強制を人々に納得させることはできない。隔離という暴力を行使するには、見えない細菌の恐怖を体現する^{スーパー・スプレッダー}「感染源患者」が必要になる。自分たちを被害者におきたい意識が、疫病を外から持ち込んでくる悪を呼び出すのである。コミックのデア・デビルに二重人格の悪役として登場するほど大衆文化に浸透したチフスのメアリー、『そしてエイズは蔓延した』のガエタンもこう^{スーパー・スプレッダー}した感染源患者の系譜に属する。1992年のリチャード・パリーの小説『ウイルス汚染着陸不可』では、異教徒の間に疫病を蔓延させようとするアラブのテロリストによって旅客機乗客がウイルスに感染する話が描かれ、現在はテロにも炭疽菌が使用されるが、映画や小説^{スーパー・スプレッダー}の中心となる感染源患者には、これからテロリストの姿が重ねられるだろう。『グランド・ゼロ 感染源』では国家に冷遇された女性細菌学者が大統領の身体にエボラ菌を打ち込み、血清と引き換えに一億ドルが要求され、エボラ菌が病院全体に蔓延する。『グローバル・エフェクト』では謎のウイルスを体内に注射した女性テロリストが警戒網を逃れウイルスを撒き散らす。これらの映画は女がうつ

すという言説をスケールアップしたものだ。イブ以来、男性を誘惑し樂園から追放する誘惑者としての女性嫌悪が、そこにはある。

映画で女は執拗に男に誘いをかけてくる。マイケル・ダグラス主演の『氷の微笑』や『危険な情事』では女が男を誘惑し死の危機に追いこむ（『氷の微笑』でシャロン・ストーンはレズビアンでサドの運命の女を好演したが、レ・ファニュの短編『カーミラ』にみるように、吸血鬼とレズビアンの同一化は古くからある）。こうした映画の誘惑する女たちは、『ドラキュラ』で夫の首に牙を食い込ませようと「こっちにおいで」と誘う吸血鬼ルーシーと同じ系列にいる。『ディスクロージャー』で、マイケルはかつての恋人で現在は上司となったデミー・ムーアにオフィスで誘惑される。それを拒否した彼は、セクハラ
の嫌疑で左遷されてしまう。だが訴訟を起こし、セクハラか逆セクハラか、その時の事実をめくり裁判が進行してゆく。誘惑された夜マイケルは、エレベーターで男性にキスをされ、その口に飲み込まれる悪夢をみる。ホモセクシャルの恐怖と誘惑する危険な女が重なるのである。マイケル・ダグラスは、『危険な情事』では自分を誘惑し平和な家庭に侵入してきたストーカー的
女性を、自業自得と言わんばかりに「実際に抹殺」し、『ディスクロージャー』では力を備え男性の領域に侵入しジェンダーを攪乱する女を、裁判で「社会的に抹殺」する。境界線を越え誘惑してくる女に杭を打ち続ける。それがマイケル・ダグラスの使命だ。

1980年代には免疫組織の強化が関心を集めその記事が雑誌を飾る。免疫とは生体が自己と自己以外のものを認識し、自己以外のものを拒絶する反応と定義にある。外から侵入する細菌に対して、メディアはジェンダー・人

種・階級に基づいた国家の戦争と防衛のイメージを使い、免疫を描きだす。たとえば、自己以外の異物を認識し撃退するT細胞は「免疫組織のランボー」などと呼ばれ男と結びつけられ、異物を飲み込み消化する大食細胞^{マクロファージ}は死んだ細胞や細菌の浄化などの「家事をする女」として扱われている。以前から身体は城など建物で描かれてきたが、「こうした記事の特徴は、身体（セルフ）と外界（ノンセルフ）を区別する境界線が厳格なことだ」²⁷⁾。エイズから国家という身体に侵入したウイルスに自己が奪われる恐怖が生まれる。だがそれにもまして恐ろしいのは文化上の境界侵犯かもしれない。身体の免疫システムを無効にするウイルスを、国境、ジェンダー、セクシャリティの文化の境界線を揺るがすゲイや娼婦や移民などの他者が運ぶ恐れである。人種の混乱、男女の区分の攪乱で、白いアメリカが瓦解するのだ。これまで分析してきた様々なテキストは、「物語」によってこの脅威を馴致し、境界線の再強化を企んでいた。ゾンビが建物の扉や窓を叩く。何が怖かったのか、『ドーン・オブ・ザ・デッド』の小説版を引用したくなった。脱出を図る一行の装甲車にゾンビが群がる。「白人、黒人、アジア人、ヒスパニック、以前は人間だった者たちが、人種や年齢や性別の区別なく、バスの両側へと盛大に跳ね飛ばされてゆく」²⁸⁾。ゾンビになり変色すると皮膚の色による人種の区分が失われる。異種混淆の混乱こそ恐ろしいのだ。

最後に

エイズ差別を告発した映画に『フィラデルフィア』がある。トム・ハンクスが演じる主人公が、ゲイでありエイズであることが発覚し、職場を解雇される。デンゼル・ワシント

ン扮する黒人の弁護士と共にエイズ差別を訴える主人公に、会社側は能力の欠陥のために解雇したのだと反論し、法廷の争いが続く。白人と黒人との兄弟愛によって、疎外と差別に敢然と挑み、やがて主人公は家族にみとられ息を引きとる。ゲイは静かに死んでゆくのだ。我々に涙を流させるために。エイズの物語の多くは死で閉じられる。エイズを悲劇の材料として利用し、芸術に昇華^{トランスセンド}することに批判的なダグラス・クリンプは「我々はエイズを超越したいんじゃない。それを終らせたいんだ」と叫んでいた²⁹⁾。「もし男とのセックスが喜びを与えてくれるなら、それで僕が死んでも泣かないでくれ」。これはまたエイズで死ぬ一年前のフーコの台詞である。エイズ患者が白人で彼を助ける弁護士が黒人変わったという従来の意識の逆転があったとしても、アカデミー賞を二部門受賞した『フィラデルフィア』にあるのは、同性愛＝エイズ＝死というステレオタイプがすり替えられた感動である。それは、過去には梅毒防止、1980年代にはエイズ予防のポスターで、死神や髑髏が使われる意識とよく似ている。死で終る物語は患者から生きる力を奪いかねない。

エイズの語り方が梅毒^{ナラティブ}の語り方を繰り返すように、新型肺炎SARSでさえも「新型」とは言えず、美馬達哉の言葉を引用するなら、「社会を防衛しなくてはならないというテーマで...歴史的に繰り返される古びた感染症の再演の一つ」にすぎない³⁰⁾。いかに最新の病^{ナラティブ}が出現しようとも、それは過去の病の語り方を繰り返してゆく。そして偏見は物語を通して感染する。それゆえ「エイズ感染の物語からの感染」を予防するために、私はこの論文を書いた。それは「エイズ感染の物語からの感染^{ナラティブ}を防ぐための物語」を紡ぐことになった。結

局物語だけは尽きることなく、無限に増殖してゆく。物語には起源がない、ゆえに結末もない。言葉はウイルスなのだから。

注

- (1) 筒井康隆『文学部唯野教授』（1990年、岩波書店）59.この本からの引用は以下本文に項を記す。
- (2) Paula A. Treichler, *How to Have Theory in an Epidemic: Cultural Chronicles of AIDS* (Durham and London: Duke UP, 1999) 11-41. この本からの引用は以下本文に項を記す。
- (3) Judith Williamson, "Every Virus Tells a Story: The Meaning of HIV and AIDS," *Taking Liberties: AIDS and Cultural Politics*, eds. Erica Carter and Simon Watney (London: Serpent's Tail, 1989) 69.
- (4) Monica B. Pearl, "AIDS and New Queer Cinema," *New Queer Cinema: A Critical Reader*, ed. Michel Aaron (Edinburgh: Edinburgh UP, 2004) 33.
- (5) Gabriele Griffin, *Representations of HIV and AIDS: Visibility Blue/s* (Manchester and New York: Manchester UP, 2000) 94.
- (6) Nelly Oudshoorn, "A Natural Order of Things? Reproductive Sciences and the Politics of Othering," *Future Natural: Nature / Science / Culture*, eds. George Robertson et al (London and New York: Routledge, 1996) 124.
- (7) Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (1919; Penguin, 1987) 31-32.
- (8) *Discover* 6 (December 1985) 53.
- (9) Richard Selzer, "A Mask on the Face of Death: As AIDS Ravages Haiti, A U.S. Doctor Finds a Taboo against Truth," *Life* (August 1987) 58-64. この記事からの引用は以下本文に項を記す。
- (10) Richard Rhodes, *Deadly Feasts: Science and the Hunt for Answers in the CJD Crisis* (London: Touchstone Books, 1997) 21. この本からの引用は以下本文に項を記す。
- (11) ディヴィッド・J・スカル『モンスター・ショー 怪奇映画の文化史』榎木玲子訳（原著1993年、国書刊行会、1998年）407。
- (12) William Patrick Day, *Vampire Legends in Contemporary American Culture: What Becomes a Legend Most* (Kentucky: UP of Kentucky, 2002) 29.
- (13) ダン・シモンズ『夜の子供たち（下）』布施由紀子（原著1992年、角川文庫、1995年）41。
- (14) ダン・シモンズ「バンコクに死す」『愛死』嶋田洋一訳（原著1993年、角川文庫、1993年）63。
- (15) Randy Shilts, *And the Band Played on: Politics, People, and the AIDS Epidemic* (New York: St. Martin's Press, 1987) 607. この本からの引用は以下本文に項を記す。
- (16) シルツには以下の伝記がある。『ゲイの市長と呼ばれた男 ハーヴェイ・ミルクとその時代』藤井留美訳（原著1982年、草思社、1995年）。
- (17) ウィリアム・ノヴァック『マイ・ライフ アービン・“マジック”・ジョンソン』池央耿訳（原著1992年、光文社、1993年）361。
- (18) *Discover* 6 (December 1985) 53. 同じ感染者でもセックスによれば自業自得、輸血では被害者に分けられる。1995年の映画『マイ・フレンド・フォーエバー』では輸血で感染した11歳の少年が、友人とエイズの特効薬を探して、ジムとハックのように、筏でミシシッピー川を下ってゆく。患者の無実を示す記号として写真などにペットや縫いぐるみを置くことが指摘されるが、この映画でも少年の横にはよく猫がいる。
- (19) Allan M. Brandt, "AIDS and Metaphor: Toward the Social Meaning of Epidemic Disease," *In Time of Plague: The History and Social Consequences of Lethal Epidemic Disease*, ed. Arien Mack (New York: New York UP, 1991) 107.
- (20) Douglas Crimp, *Melancholia and Moralism: Essayson ADIS and Queer Politics* (Cambridge: The MIT P, 2002) 46-52. またガエタンが幽霊として甦り、自分の間違った印象を正す『ベイシエン ト・ゼロ』という映画がある。
- (21) デフォーモ『ベスト年代記』で「病になった者が病気を他人にうつしたがる邪悪な傾向」に触れ、お前も病気に罹れと貴婦人に無理やりキスをする

男の話を紹介しているが、「私はこれらの話をその真実を保証できるような実際に自分が体験したこととして語ってはいない」とも牽制している。

Daniel Defoe, *A Journal of the Plague Year* (1722; Penguin, 2003) 148, 156.

- (22) ジャン・ハロルド・ブルンヴァン 『くそ！ なんてこった エイズの世界によろこはアメリカから来た都市伝説』 行方均訳（原著1989年、新宿書房、1992年）161-68 .
- (23) Henry Herbert Goddard, *The Kallikak Family: A Study in Heredity of Feeble-Mindedness* (1912; New York: Macmillan, 1923) 71.
- (24) Nathaniel Hawthorne, "Rappaccini's Daughter," *Nathaniel Hawthorne's Tales* (1844; Norton, 1987) 198, 201.
- (25) サンダー・L・ギルマン 『「性」の表象』 大瀧啓裕訳（原著1989年、青土社、1997年）494 .
- (26) Judith Walzer Leavitt, *Typhoid Mary: Captive to the Public's Health*(Boston: Beacon P, 1996).
- (27) Emily Martin, *Flexible Bodies: The Role of Immunity in American Culture from the Days of Polio to the Age of AIDS* (Boston: Beacon P, 1994) 53.
- (28) ジェイムズ・ガン 『死者の夜明け ドーン・オブ・ザ・デッド』 入間眞訳（竹書房、2004年）216 .
- (29) Douglas Crimp, *Melancholia and Moralism*, 33.
- (30) 美馬達哉 「アウトブレイクの社会的効果」『現代思想 第31巻第9号』（青土社、2003年）88 .



図1 Leavitt, Typhoid Mary, 133.